様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０８２３

研究課題名（和文）日記史料からみた清末のモンゴル王公と清朝支配

研究課題名（英文）Study on relationship between Mongolian Wang-Gong and Qing court : Focusing on diaries of the late Qing dynasty written by Mongolian Wang-Gong.

研究代表者
中村　篤志（NAKAMURA, ATSUSHI）

山形大学・人文学部・准教授

研究者番号：６０３７２３３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、モンゴル王公が記した日記史料に注目した。清末に来京した乾清門行走バボードルジの日記などの分析から、北京での宮廷儀礼や乾清門行走の実態が明らかになった。さらにはこれら宮廷での活動や出来事、皇帝との接触などを通して、王公がいかなる対清認識・相互認識を形成していたかを分析し、清朝のモンゴル統治のメカニズムについて考察した。

研究成果の概要（英文）：In this research, focusing on diaries written by Mongolian Wang-Gong(王公), I clarified the actual activities of Qian-Qing-Men- Xing-Zou(乾清門行走) and the actual situation of court etiquette of the late Qing dynasty. Besides, I analyzed the changes in Wang-Gong's awareness of Qing court to be molded by these activities.

研究分野：人文学　東洋史

キーワード：モンゴル　王公　日記　清末　宮廷儀礼

１．研究開始当初の背景

従来、清朝の藩部統治は、王公やラマ、ベクなど既存の支配者層に統治を委ねる「間接統治」あるいは「緩やかな統治」などと評価されてきたが、充分な実証研究が蓄積されていたわけではなかった。近年では、社会レベルの行政文書の分析から、現地社会の自律性を解明する研究が進展し、モンゴル史においても、モンゴル固有の社会関係、特に貴族の血統関係に由来する社会組織（オトグ・バグなど）の存在が明らかになるなど一定の成果を挙げてきた。

しかし、モンゴル社会の自律性が高いということは、同時に、清朝が地域の支配者層を掣肘し、社会を統制するために作った制度や組織が十分機能していなかったことを示す。それでは、清朝はいかにして自律的なモンゴル社会を長期間統合していたのだろうか。清朝支配か現地社会の自律性かという二項対立的な枠組みを越えた、新たなモデルの構築が必要だと考える。

また近年の社会研究の進展は、上述のように、主にモンゴル国に所蔵されている膨大な行政文書の分析によって成し遂げられた。しかし行政文書の性格上、描ける社会像には自ずと限界がある。今後、研究をさらに進展させるためにも、行政文書以外の多様な史料を調査し、議論の俎上に載せることが必要である。

２．研究の目的

以上の研究状況を踏まえ、本研究では、モンゴル社会で実権を握る王公が、直接かつ恒常的に皇帝や清朝官僚らと接触する「場」に注目し、そのような「場」における王公や皇帝・官僚の具体的行動や、対面接触の様相を明らかにし、その結果として、いかなる他者認識が形成されたかを主たる考察対象として設定した。

特に注目したのが、北京・紫禁城内の儀礼や宴会である。モンゴル王公は、満洲の王公らと緊密な婚姻関係を結び、宮廷でも皇帝に近い高い席次を与えられ、定期的に夏の熱河・避暑山荘や年末の北京に赴いて皇帝へ謁見する義務を負っていた。このような定期的な皇帝への謁見（朝覲）は、モンゴル王公にとって重い負担であると同時に、王公の特権的身分を確認し再生産するための重要な契機でもあった。

たとえ、このような宮廷空間での謁見が単に儀礼的・形式的なものであったとしても、王公が皇帝や官僚らと対面接触をし、清朝支配というものを視覚的に体験する機会であったことは事実である。このような接触や体験は、王公の対清認識・相互認識の形成にいかなる影響を与えたのか、引いては清朝のモンゴル統治全体の中で、どのように評価すべきだろうか。

このような問題にアプローチするために、本研究では、主にモンゴル王公や清朝官僚らが記したモンゴル語・漢語の日記史料を分析することとした。前述のように、近年主流となっている行政文書や既存の清朝編纂史料などからは、実際の宮廷儀礼の様子や、そこでの各人の行動までは読み取りにくい。さらに、個人の対他認識まで考察するには、より私的性格の強い史料を分析する必要がある。中国史の分野では、漢人官僚が著した文集や筆記史料、日記の類いは質量共に豊富であるが、モンゴルに関する記述や、モンゴル王公が参加した宮廷儀礼に関する記述は、収集や分析が十分ではない。またモンゴル人が記した日記史料については、その存在すら殆ど明らかになっていなかった。

そこで本研究では、第一にモンゴル王公が記した日記史料の調査・収集を中心に進め、漢人官僚が書いた漢語史料も調査・分析対象に含めた。第二に、これら基礎資料の収集を元に、宮廷儀礼などの「場」において、王公はいかなる経験をしたのか、そして、その経験が統治者との間にいかなる関係性や相互認識を形成していたのかを解明し、清朝のモンゴル統治のメカニズムとその歴史的意義について検討を加えることとした。

３．研究の方法

本研究では未調査・未公開の日記史料の調査・収集が重要な鍵となる。上述のように行政文書を中心に進められてきた研究史において、未調査・未公開の日記史料をなるべく多く収集し、史料を共有するだけでも十分な意義があると考える。そこで、国内は元より、中国・モンゴル国・台湾などで広範に日記史料の収集を行った。

また清朝編纂史料や漢語の刊行史料、既収集の行政文書を改めて整理し、分析を進めた。微細な日記史料から儀礼の全体を復元するためにも、これらの編纂史料や漢語史料の分析は重要となる。特に、未調査のモンゴル語日記史料は読解に苦しむ点が多く、同時期に宮中に出入りしていた満州人や漢人官僚の日記史料や筆記史料を比較することで、宮廷儀礼の具体的様相、モンゴル王公の政治的位置を明確にするよう心がけた。

成果公開に当たっては、本研究が、史料的にも研究視角的にも先行研究と異なるアプローチを取るため、学会では、日記や宮廷儀礼に関する実証研究だけでなく、人の移動と相互認識の形成・変容というより広いテーマでモンゴルの政治史・社会史を捉え直す報告も行い、学界全体で議論を共有できるよう心がけた。

４．研究成果

成果の第一に挙げられるのは、光緒 9（1883）年末、ハルハの閑散王公バボードルジが北京に参勤し、乾清門行走に従事した際に記したモンゴル語日記史料の整理・分析である。記述内容の分析から、この日記は、病気で来京できない兄の扎薩克に代わり、宮中

での活動内容を報告するために書かれたと推測された。

バボードルジは「乾清門行走」として宮中に参勤したのだが、このような「行走」制度には従来未解明な点が多かった。以前から、来京王公の一部が「御前行走」や「乾清門行走」に取り立てられること、特に「御前行走」には一部の有力王公のみが任じられることなど、その重要性は判っていたが、「行走」の具体的な職務内容や儀礼空間での立ち位置など、その実態は明らかではなかった。この日記によって、行走王公が来京した一般王公とは別に皇帝に謁見し、宮中行事でも、王公としてではなく実際に侍衛として皇帝に随行し侍立するなど、その特別な職掌と特権的地位が明らかになった。また当時幼かった光緒帝がモンゴル語で王公や喇嘛と挨拶を交わし、規定通りの宴会が開かれる様子が明らかになるなど、朝覲の実態が明らかになった。

また、バボードルジの日記以外にも、従来未公開・未調査のモンゴル王公の日記や書簡や、宮中でのモンゴル王公について記した漢人官僚の日記等を収集することができた。特に、来京王公が郷里に当てた書簡からは、朝覲や行走が清朝中央への陳情の重要な契機になっていたこと、在京の喇嘛や有力王公がその取り次ぎの窓口になっていたことが明らかになった。さらに郷里に向けて、新たに発布された法令や、訴訟の裁定結果、そして同じハルハ四部のどの王公がいかなる賜与に預かり、誰が行走に取り立てられたかが報告されていた。このような賜与や取り立てについては、バボードルジの日記でも克明に記録されていた。

これらの記述をつなぎ合わせると、現時点では以下のような統治メカニズムの存在を想定することができよう。

すなわち、王公にとって朝覲は皇帝や中央官僚と接触する限られた機会であったが、来京しても「行走」王公を除けば、皇帝との接触機会はわずかしか与えられていなかった。しかし、接触機会が限定的であることは、清朝の求心力を弱める方向では作用しなかった。王公らは、規定の爵位とは別に、「行走」への取り立てや様々な賜与などで差異化されており、朝覲という機会を利用し、郷里の他の王公等に先んじてこれらの賜与や恩典に預かることを競い、時に陳情などを行っていた。つまり、清朝側が意図せず作為せずとも、王公が宮廷に集まり、互いに「横睨み」し、相対的地位の上昇を競う状況が生まれており、結果としてそれが皇帝の求心力のように機能していたと考えられる。

無論、このようなメカニズムはあくまで全体の一部に過ぎない。今後さらに実証を重ねる必要があるが、本研究期間中には全体像を明らかにすることはできなかった。新たに収集した史料で公開できなかったものもある。これらは今後の課題として残ったが、本研究により、人の移動とそれに伴う相互認識の形成・変容の解明という課題設定が、史料的にも方法論的にも十分成り立つことが確認できた（基盤研究Ｃで、駅站などを介した人の移動をテーマとする次なる研究を展開している）ことは、成果として特筆できると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

①アルタンザヤー、中村篤志訳「モンゴルにおける印信ホトクトのシャビ=ナルの牧地について」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第 18 号、2017、pp.13-24

②中村篤志「書評：小沼孝博著『清と中央アジア草原：遊牧民の世界から帝国の辺境へ』」『歴史』125 輯、2015、pp.75-83

③中村篤志「フルンボイル遊牧社会における地縁結合：Ya.シャーリーボー氏の口述に現れた“アイマグ”をめぐって」『東北アジア研究』査読有、18 号、2014、pp.51-79

〔学会発表〕（計　6　件）

①中村篤志「藤田嗣治「北平の力士」と清朝宮廷相撲」山形大学歴史・地理・人類学研究会第 18 回大会、2016 年 6 月 18 日、山形大学（山形県山形市）

②中村篤志「遊牧と移住のあいだ：20 世紀前半内モンゴル・フルンボイル社会の動態から」東北アジア研究センター共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」国際シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015 年 3 月 8 日、東北大学東京分室（東京都千代田区）

③中村篤志「清朝治下モンゴルにおけるヒトとモノの移動」東北アジア研究センター共同研究シンポジウム「畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバリゼーション」、2015 年 3 月 7 日、東北大学（宮城県仙台市）

④中村篤志「清代モンゴル遊牧社会と王公『支配』：所有、移動、調整をめぐって」地域コンソーシアム（JCAS）次世代ワークショップ「近現代モンゴルにおける人間＝環境関係の変容」、2015 年 1 月 11 日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（北海道札幌市）

⑤中村篤志「清朝モンゴル統治再考：モンゴル語日記史料を手がかりに」満族史研究会

第 29 回大会、2014 年 5 月 31 日、東北大学（宮城県仙台市）

⑥中村篤志「モンゴル王公の年班・行走：光緒 9 年乾清門行走日記の分析から」東北アジア研究センター共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」第一回研究会、2013 年 6 月 1 日、東北大学（宮城県仙台市）

〔図書〕（計　１　件）

①新宮学、白帝社、『近世東アジア都城史の諸相』2014、pp.89-111（第 3 章「清朝宮廷におけるモンゴル王公：光緒 9-10 年乾清門行走日記の分析から」）

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

中村　篤志（NAKAMURA ATSUSHI）

山形大学・人文学部・准教授

研究者番号：６０３７２３３０